

---

good morning...?

ACES

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

good morning・・・?

### 【Nコード】

N7312A

### 【作者名】

ACES

### 【あらすじ】

大学生、黒井貴之が半ば強引に参加させられた合コンの翌朝。二日酔いで痛む貴之の足元の女性は誰、？、？

## （前書き）

初めて投稿します。軽い気持ちでサクッと読んで頂けたらと思います。それでは本編をお楽しみください。

頭が痛い。昨夜は何をしてたんだっけ？ああ、確か、、

「おい！黒井！」

「、、、、」

「黒井貴之。」

誰かが誰かを呼ぶ声に、まどろんでいた意識が覚醒する。それもその筈。黒井貴之とは俺の名前だから。

「にゃ？」

「にゃ？じゃなくて。寝てるなよ、、。」

「だつていま休憩時間だろ？」

「休憩は終了だ。先輩達のチームとお前のチーム合同でOBチームと殲滅戦だ。」

「殲滅戦、、！？なんだつて？」

「先輩達とOBで話し合つてだな。俺達が負けたら暫くフィールドを貸すことになった。」

「、、、勝つたら？」

「合コンセッティングするとき。」

「断つたら？」

「人数不足で敗北。フィールドの無期限レンタル決定。」

「彼女が欲しいからつてこんな無茶するのかね、先輩達は、、。」

「サバイバルゲームしてる奴なんて」

「とにかくだ。試合開始は十分後。」

ブザーと同時に、迷彩服とエアガンで武装した大学生、社会人達は大学構内の特設フィールドに散開した。

（、、、めんどくさいな、、、）

前方に現れた敵の一人を狙撃すると、被弾した男は退場していった。

試合が終わって見ると、貴之のチームは数名が生き残り、社会人チームは全滅。先輩達の賭けは勝利に終わった。

「それじゃあ先輩！合コンセッティング、よろしくお願いします！」

「そうだな。お前らの後輩ならセッティングしてやる。お前らの相手は俺達が努めてやる。」

「は、話が違います！」

「勝ったチームには賞杯をやるさ。どこぞの神風特攻チームは訓練が必要だな。ふむ。四名だな。わかった。女性は四名集めておく。」

「や、俺は遠慮します。」

「貴之！」

「なにも持ち帰りまでもなくてもいいんだ。一緒に楽しく酒でも飲んでこいよ。」

こうして、チームメイトに近くの居酒屋ばかり集まる界限へと拉致された。現れた四名の美しい女性達を相手に、最初は黙っていた貴之も、酒の力に身を任せ、それなりに楽しんでいた。

そこから何軒か居酒屋をはしごしたのは覚えている。最終的に女性陣の一人の高層マンションまで行った記憶が、、

高層マンション？女性の部屋？そうだ、そこから記憶がない！

かばっと身を起こし目を開けると、見慣れない光景が目に入った。慣れない匂いが空間を包んでいる。

「う、、ん。」

声に驚いて足元を見ると、女性陣の一人が毛布も掛けずに眠っている。

確か、この部屋は足元の眠れる美女の所有物だっただろう。少しず

つ意識がハッキリしてきた。

周りを見ると、誰もいない。チームメイトも、他の女性陣も。

「じゃあそろそろ帰ります。」

「送ります！」

そんな事を言ってた様な気がする。

そこで、足元の美女が下着姿でいる事に気が付いた。必死に記憶を辿るが、行為に及んだ記憶はない。いや、覚えていないだけ？

「ん。」

突然起きた女性と目があった。

「あ、おはよ。貴之くん。」

「は、はい。おはよう、ございます。」

「あれー？あたしいつの間に眠ってた、、キャアアア！」

自分の姿を見た女性は悲鳴を上げ、床にペタリと座り込んだ。

「あ、ななっ、えっ！えっ！？」

「あ、あの、落ち着いて！」

「このお！」

女性は近くにあったチューハイの空き缶やビールの空き缶、果てにはビール瓶を投げつけてきた。

「んにゃ！ちよっ！」

避けきれなかった瓶が頭に当たった。幸い割れることも血が出ることもなかったが、貴之は気絶した。

「で、ごめんなさいは！？」

「いや、ですから、記憶にございませんって。」

「なんですってえ！」

貴之が目を開けると、手と足にサランラップで手錠をされていて、

貴之の目が醒めたとたん女性は尋問（拷問？）を始めた。

「それに、あなたも、その、そういうことをした記憶はないんですよ！ だったら誰かに聞くなりして証拠を集めてから」

「被告は黙ってなさい。」

「いや、だから。」

そこへ、どこからか携帯電話の呼び出し音が聴こえてきた。貴之の知らない着信音。女性がポケットから携帯電話を取り出し、耳に当てた。

「もしもし！」

「あら。もう起きたの？ アンタにしちゃ早いわね。」

静かな部屋に、電話の相手の声が響いた。

「聞いてよ！ 貴之くんがね。あたしを」

「ああ、二人ともいい寝顔ね。」

「へっ？」

「ホラ昨夜はなんだか知らないうちにカメラが回ってたでしょ。」

「そうだったけ？」

「安心して。アンタ別にその子になにもされてないから。いや、朝帰りは体に悪いね。あたし寝るね。」

「あ、ちよつと。なんで電話掛けてきたの？」

「勝手に誤解してその子に危害を加えそうだったから。」

ああ、お姉さん。顔を思い出せないけど、時代が時代なら、あなたの産まれた年は西暦0年になってました。ありがとうございます！ 姐さん！

「それじゃ。おやすみ。」

通話が途切れ、ツーツ、ツーツ、と同じ間隔で電子音が聞こえる。

「あの、、、？」

「ごめんね！ あたしまだドジやつちゃって！ ああ、どうしょ！ 頭大丈夫？ 痛くない！」

女性は狂ったように貴之の容態を聞いてくる。

「だ、大丈夫ですから、この手錠を外してくれませんか？」

「ああ！ごめんね！」

慌ててサランラップでぐるぐる巻きにしてこしらえた手錠を外す女性。

「本当にごめんね！」

「いや、俺こそ泊めてもらって」

「いいの。それより大丈夫？痛くないの？」

ここに来て、ようやく女性の名前を思い出した。

「大丈夫ですから、秋さん、その。」

「ん？」

「服、着ちゃって下さいよ。」

「お待ちせ。」

台所から運ばれてきた朝食の匂いが、部屋に充満してきた。秋さんがお詫びにと用意してくれたのだ。

「遠慮なくどうぞ。」

秋さんが百万ドルの笑顔を浮かべながらそう言った。

「頂きます！」

「お代わりしてもいいからね。」

「ふあい。」

「なんだか、、、」

「ん？」

「変なの。朝御飯食べて貰ってとても嬉しい。」

「ビンボー大学生にとっちゃ秋さんは天使に見えるよ。」

そう言うのと、秋さんは声に出して笑った。その笑顔は、今まで見たどの表情よりも素敵で美しかった。

「よかったら、また来てもいいですか？」

「えっ！な、なん、えっ！ええっ！？なんで？」

「秋さんが可愛いから。」

貴之は真面目に言ったが、秋は真剣な表情の貴之を見て笑った。つられて、貴之も笑った。



「ただし。誤解される様な真似はしないように。」

「そうですね。瓶を投げられない程度に。」

二人は目をあわせると、再び笑った。

## （後書き）

読んで頂いた皆様。ありがとうございます。なにぶん初投稿ですから、至らない点もたくさんあります。評価、特にここをこうしたら良い。ここはこう直したら良い。など、意見を頂けたら幸いです。次回はファンフィクションを執筆しております。これからよろしくお見知り置きを。最後になりますが、読んで下さった皆様。本当にありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7312a/>

---

good morning...?

2010年10月28日03時48分発行